

伴走者が自我形成に果たした役割
タッチ・ザ・ネイチャー追跡インタビューからの考察

文学部社会学科社会学専攻

12012070 植西 美帆

指導教員 立木 茂雄

伴走者が自我形成に果たした役割

タッチ・ザ・ネイチャー追跡インタビューからの考察

目次

第1章 序論 研究の背景 1.

第2章 先行研究からの展望 2.

第1節 タッチ・ザ・ネイチャープログラムの概要 2

第2節 伴走者とその効果・2003年度報告書より 3

第3節 本検証の意義 4

第4節 自我の成長における他者の重要性 4

第3章 調査 7

第1節 調査対象者 7

第2節 質問項目とデータ化の手法 7

第3節 調査の具体的手続き 9

第4章 結果 11

第1節 リーダーへのインタビュー結果 11

第2節 伴走者インタビュー 17

第5章 考察 18

第1節 仮説の検証 18

第2節 両インタビューより考察 19

第1項「鏡」としての伴走者 19

第2項 試着室の鏡効果 20

第3項 カメラという役割の重要性 22

参考文献、引用文献リスト

第1章 序論・研究の背景

私たちは普段、さまざまな立場のさまざまな他者とかかわりながら、社会生活をあつている。人は常に他者からなんらかの影響を受けながら生活しているはずであるし、また他者との関わりによって人間の自我は変化する、という相互作用論に基づくならば、私たちは自我は日々変容しているはずである。しかし、日常生活で実際にそのことを実感することはとてもむずかしい。

そんな中でタッチ・ザ・ネイチャープログラムの追跡調査に参加して、私がまず興味を覚えたのが、伴走者の存在であった。通常のキャンププログラムではあまり存在しない役割であるというだけでなく、キャンプリーダーたちの内面の成長を促す、という役目のためだけにそこに設置される存在、人に影響を与えるために存在する役割であり、しかもそれが一定の効果あげている、という事実に私は非常に興味をもった。

しかし、伴走者という存在自体が、2003年度のプログラムより初めて取り入れられた考え方であり、伴走者の役割についても、「信頼できる第三者」として、リーダーたちと関わる、という共通概念の他は特に決まりごとはなく、伴走者自身の持つ伴走者概念もゆるやかであったこと、効果の1つであるモデリングは予期せぬ効果であったこと、そもそも伴走者を大学生が務めることとなったのはなぜかなど、伴走者について知るにつれて、この伴走者という存在に必要な要素、伴走行為が成功する条件、伴走者が効果をもたらした要因などを、伴走者が自我形成に果たした役割について検証することによって埋もれた可能性を発見できるのではないだろうか、という疑問がわいてきた。具体的には、リーダーたちの内面の成長に伴走者がよい影響を及ぼしたとするならば、伴走者の役割として想定されていた行為の中で、具体的にはどういった部分が、リーダーたちにより影響を及ぼしていたのか、そしてその行為がなぜよい影響を与えていたのか、といった部分についてはあまり検証されていない。

また、伴走者が自我形成に果たす役割について検証することは、今後タッチ・ザ・ネイチャーのようなキャンププログラムを行う際に、伴走者という役割を設置するならば、いったいどのような属性を持った人物が、どういった条件化でどういった働きかけを行うことが望ましいのか、といった一定のテンプレートを作る上でもひとつの手がかりになるのではないだろうか。

伴走者の果たした役割について、いちばん実感をもってわかっているのは、当事者であ

ったキャンプリーダーと伴走者本人である。そこで彼らを調査対象者としたインタビュー調査を行い、その結果を分析することで、伴走者がキャンプリーダーの自我形成にどのような形で関わっていたのかを検証しようと思う。

第2章 先行研究の展望

第1節 タッチ・ザ・ネイチャープログラムの概要

本論文で取り上げるタッチ・ザ・ネイチャープログラムとは、財団法人 こども教育支援財団が主催する教育支援活動の一環として平成13年度より実施されている無学年制自然体験キャンププログラムである。かつて不登校であった、もしくは現在も不登校傾向のある高校生たちを対象とし、彼らが年下である小学生キャンパーたちのリーダーとして、共に農作業や自然に触れる体験をし、リーダーとして振る舞うことで、彼らが精神的に成長することを期待して企画されたプログラムである。主な活動内容は農作物の植え付けや収穫、食事作り、自然観察やオリエンテーリング、レクリエーション活動などである。2002年度に芦屋で行われたプログラムからは、リーダーの行動の変化や、それに伴うリーダー自身の自己評価の変化について、科学的に効果を検証する、効果測定が行われている。その結果、ある程度自己評価の高かった生徒については、行動の変化に伴った自己評価の伸びがみられた。

一方で、参加者の中で、他者に対する具体的な行為のレベルでは成長が見られたにも関わらず、タッチ・ザ・ネイチャー終了後の質問紙による測定では、自己に対する評価が参加前と比べ、下がってしまったリーダー(Aさんとする)がいた。

そこで、2003年度に広島で行われたプログラムでは、Aさんのような、行為の変化と自己評価の変化に不一致が生じる生徒にも、自己に対する意識の変化の肯定的な変化が期待できるよう、プログラムの見直しが行われた。そこで設けられたのが、キャンプ終了後に、自分たちの行動を振り返り、その変化に気づき合えるための「振り返りの場」と、本論文の研究テーマでもある、信頼できる第三者としての「伴走者」である。

第2節 伴走者とその効果・2003年度報告書より

伴走者がもたらした効果とその要因については、本年度の追跡調査および本論文のテーマでもあり、後述の考察でも述べるが、ここでは、2003年度報告書より伴走者の定義と、2003年度の効果測定とその考察によって明らかになった伴走者の効果について簡単にまとめておく。

2003年度の効果測定で課題とされた、行為の変化が自己評価の伸びに結びつかなかった生徒への対策として設けられたのが、「伴走者」の存在である。2002年度のAさんのようなケースにおいて、行為の変化を自己に対する意識の変容に結びつけるためには、信頼できる第三者が、リーダーたちの思考に寄り添い、彼らの話に耳を傾け、彼らの話をきちんと受け止めることが必要であると考えられた。伴走者とは、「その人のそばにいて、その人を評価するでもなく、否定するでもなく、彼がものを考えるのにずっと寄り添って、彼の考えることを理解しようとし、耳を傾けるような存在」のことである。（報告書より抜粋）これはG・H・ミードの主張する、自己は他者との関係の中に存在する「対他的な自己」と自分の内面に対話を行う存在である「対自的な自己」の二つの側面からなるという考えに基づいている。（Mead 1934）そしてAさんの場合は、子どもたちとの関わりの中での成長（「対他的な自己」）が、自分自身に対する評価（「対自的な自己」）に上手く取り入れられなかったケースであり、伴走者は信頼できる第三者として、そういったリーダーたちの対自的な循環に、対他的なあり方の変容を取り入れる手助けをすることを目的として設置された制度である。2003年度のタッチ・ザ・ネイチャーでは、同志社大学立木ゼミの院生および大学生が伴走者として各班に一人ずつつき、リーダー達の様子をカメラに収め、その撮影時に彼らとふれあった。また、毎回のキャンプ終了後に設けられた振り返りの会では、ファシリテーターとしてつき、彼らの思考に寄り添うという形で、この役割を担った。以下が報告書で考察されるその効果である。

結論から述べると、伴走者がプログラムの「場」に存在し、リーダーたちと関わったことは、リーダー達に確実に良い効果をもたらしたと考えられる。

まず、2003年度のプログラムでは、行為のレベルでの変化と自己に対する評価の変化が乖離しているリーダーはあまり見られなかった。このこと自体が伴走者設置の効果であるといえる。また、伴走者の存在は当初予期されていなかった効果も生んだ。それは「モデリング」と「憧れの醸成」である。

広島でのタッチ・ザ・ネイチャーに参加しているリーダーたちの多くは、高校中退とい

う大きな挫折を経験し、その時点で自分らの将来像を見失っていた。そこへ伴走者として「現役の大学生」が現れ、リーダーたちと撮影時の会話や手紙を送るなどのやりとりをした。そしてそうしたやりとりが、リーダーたちに大学生への「憧れ」を持たせ、リーダーたちのうち、今年の卒業生は全員、大学や専門学校へ進学したのである。このような進学状況は、プログラムが行われたクラーク高校広島分室では前例のないケースであった。

以上のような内容が、2003年度の考察で得られた伴走者の効果とその要因である。(2003)

第3節 本検証の意義

伴走者が、2003年度のプログラムにおいて、一定の効果をあげたことは、前節のとおりである。

しかし報告書では、伴走者の役割や行った行為のうち、具体的にはどういった部分が、リーダーたちの内面の成長に影響を及ぼしたのかについてはあまり検証されていない。また、今後、タッチザネイチャーのようなキャンププログラムを、今回プログラムが実施された高校以外の場所でも企画し、そこでも「伴走者」という存在を設置するならば、伴走者という役割の概念や、伴走者に期待される態度や行為を、ある程度明確化することが必要となってくる。

このことから、リーダーたちの内面の成長に伴走者がよい影響を及ぼしたとするならば、伴走者の役割として想定されていた行為の中で、具体的にはどういった部分が、リーダーたちにより影響を及ぼしていたのか、また、その行為がなぜよい影響を与えていたのか、といった部分について検証することは意義があると考えられる。

第4節 自我の成長における他者の重要性

なぜ伴走者の存在が、リーダーたちの内面的な成長、すなわちリーダーたちの自我の変容により影響を及ぼしたのかという問いに答える際に、有効となってくるのが、自我とは固定されたものではなく、人間の成長にともなって、変化・変容していくもので、自我の形成は他者とのかわりによる相互作用なくしては成り立たないという象徴的相互作用論的な観点である。

ミードは、人間の自我は孤立した存在ではなく、社会的な経験や活動の中で、他の人間とのかわりで生まれ、発達するものであるとした。またこの自我の発達には二つの段階

があり、第1の段階では、家族や友人といった自分にとって「意味のある他者」からの期待を自己に結びつけて取り入れる「役割取得」を行うことによって自我が形成される。第2の段階では、人間は、多くの人にかかわり、複数の他者の多様な期待に直面したときに、そうした多様な期待をまとめあげ、組織化し、一般化することがおこなわれる。そしてそこで生み出されるのが、その「場」全体の態度を表すものとしての「一般化された他者」の期待である。この「一般化された他者」の期待を十分に取り込むことが、個人の自我の発達に必要である。(Mead.1934)

タッチ・ザ・ネイチャーは、キャンパーである小学生や大学生伴走者、実施場所である農園の関係者など、リーダーたちが普段の学校生活では出会うことのない多様な他者が存在する「場」である。彼らが普段とは違う状況に直面し、「一般化された他者」からの視点を必要としたとき、彼らの側についていたのが伴走者である大学生たちであった。伴走者はリーダーたちをずっとビデオカメラで追いながら、キャンプ中や振り返りの会ではリーダーたちの行動や話に反応を返す存在である。キャンプ中の自分たちをいちばん側で見ている人たちである伴走者からの反応は、彼らにとって「一般化された他者」からの反応であったのではないだろうか。通常、「一般化された他者」とは個人の中に生み出される実態のないものである。しかし、タッチ・ザ・ネイチャーという「場」の中でリーダーたちは、伴走者という、日常生活ではあまり出会うことのない特殊な存在と、彼らが持つビデオカメラという、一種「他者からの目」を象徴するような道具を通して、目に見える形で「一般化された他者」の期待を受け取っていたのではないだろうか。リーダーたちにとって、伴走者からの反応は、タッチ・ザ・ネイチャーという「場」の全体の態度を表す、具現化された「一般化された他者」からの反応であり、彼らは、その反応を受け取ることで、他者から自分に向けられている客観的な「まなざし」の存在を意識していたのではないかというのが一つ目の仮説である。

そして伴走者の存在に関するもう一つの仮説は、伴走者とその行為は、リーダーたちにとって、自分のことを自分で見る、つまり、自己を写し、チェックする「鏡」の役をも果たしていたのではないかというものである。

この自己を写す鏡という概念は、C.H.クーリーの「鏡に映った自我」の概念に基づく。クーリーによれば、人間は自分の顔や姿を自分で直接知ることはできない。しかし、鏡に映った姿を見ることによって、自分自身の顔や姿のありさまを知り、それによって、喜んだり、悲しんだりする。このことと同じように、人間は他者のうちに自分を見る。他の人

間のうちにイメージされている自分の姿、行為、性格を想像を通じて自分自身が認識することで、自己の自我を形づくる。つまり、他者が自分の心を映し出す鏡の役割を果たし、自分の行動をフィードバックすることで自己を知ることが可能になるということである。自我は「鏡に映った自我」として、具体的に現れるものである。クーリーは、自我はこういった形の他者とのかかわりにおいて社会的に形成されるものだとした。(Cooley 1902)

タッチ・ザ・ネイチャープログラムの中で、伴走者は、リーダーたちのすぐ側で、彼らの話に耳を傾け、そしてその思考に寄り添う存在であった。リーダーたちは、そんな伴走者からの視線や反応を、他者からのまなざしとして意識すると同時に、伴走者という「鏡」の反射から、そこに映った自分の行為や、自分自身をも見ていたのではないかと考えられる。

追跡調査を行う中で生まれた以上の仮説をもとに、本論文では、リーダーたちは、伴走者という存在によって、タッチ・ザ・ネイチャーという「場」の総意としての他者のまなざしと、伴走者という「鏡」に映った自己を見る自分自身のまなざし、内と外からの2つの「まなざし」の存在を意識し、そのことが、彼らの自我の形成、つまり内面の成長により影響を及ぼした、という仮説を検証する。

検証方法としては、2003年度のタッチ・ザ・ネイチャープログラムに参加したリーダーたちへのインタビュー調査を行い、リーダーたちが実際に、伴走者の存在と彼らが行っていた行為をどのように捉えていたのか、をインタビュー内容より検証する。また同時に、昨年のプログラムで伴走者として参加した院生および大学生(当時)にも、インタビューを行い、彼らが伴走者という自分をどう解釈し、具体的にどういった態度を、意図して、もしくは意図せずにとっていたのか、ということを明らかにする。

第3章 調査

第1節 調査対象者

調査対象者は、2003年度のタッチ・ザ・ネイチャーにリーダーとして参加していた、クラーク記念国際高校広島分室の高校生（当時）15名のうち、全4回のプログラムに3回以上参加したリーダー10名である。リーダーたちのうち、6名が現在大学や専門学校に通う卒業生であり、4名は現在もクラーク広島分室に通う2年生である。今回の分析データに関しては、聞き取り調査を行ったリーダー10名のうち、ICレコーダーでの記録を了承し、1時間から1時間半程度のインタビューが可能であった8名のデータを対象としている。

また、リーダーたちのインタビューから得た内容を裏付け、伴走者側の伴走者に対する認識を明らかにするために、伴走者として参加した、同志社大学立木ゼミの院生および学部生（当時）の5名にも、インタビュー調査を実施した。

第2節 質問項目とデータ化の手法

今回のインタビュー調査では、エピソードインタビューの手法を使い、リーダーたちからタッチ・ザ・ネイチャープログラムと、その場における他者との関わりの主観的解釈と、プログラムに参加した前後から現在に至るまでの彼らの自己物語について聞き取り、プログラム終了から一年が経過した現在、リーダーたちの自己の物語の中に、タッチ・ザ・ネイチャーでの体験がどのように組み込まれているのかを聞き取った。

質問項目は、「あなたにとってタッチ・ザ・ネイチャーとは一体どういうものでしたか」といった、プログラムの主観的解釈を問う質問、「プログラムに参加することになったそもそものきっかけはなんですか、またそのことをどのように感じていましたか」などのナラティブに彼ら自身の自己物語を問う質問、「他の人とのかかわりの中で、うれしかったこと、つらかったことは、もしくは助けてもらった、助けてあげたことは、誰との、どんなことでしたか」といったタッチ・ザ・ネイチャーにおける他者との感情の交換、そして対処資源の交換、の4つの項目を事前に設定し、それに沿った設問を用意したが、あくまで彼らの自己物語を自由に語ってもらうため、インタビュー中はリーダー自身の話の流れにそった質問の仕方を重視した。

また伴走者へのインタビューでは、伴走者として彼らが行っていた言動や、それに対して感じたリーダーたちの反応について重点的に聞き、伴走者が「伴走者という自分をどう解釈していたか」「（リーダーたちから）どう解釈されていたと思っているか」を個々の質

問を通して明らかにすることを目的とした質問設定を行った。こちらを用意した質問は絶対的なものではなく、質問全体を通して、伴走者行っていたこと、感じていたことを明らかにすることを重視した。

インタビュー調査で得たデータの分類には、KJ 法の手法を用いた。KJ 法とは、蓄積された情報から必要なものを取り出し、関連するものをつなぎあわせて整理・統合する手法の一つで、カード（紙片）を活用するところに大きな特徴がある。また、内容や質がまちまちな情報をまとめ、全体を把握するのに有効な手法である。通常はある集団や組織の中で、解決すべき問題が存在する場合に、その組織のメンバーが集まり、知恵を出し合って、課題解決の方法を探ろうとするときに用いられる手法である。タッチ・ザ・ネイチャープログラムにおいても、リーダーたちに一日の内容を振り返り、自分たちの変化に気づいてもらうための振り返りの会で、この手法が用いられている。

今回は、インタビューで得たデータを筆者が単独で分類することになるため、通常的手法とは少し異なっている。まず、インタビュー記録のテープ起こしで得たデータから、伴走者についてと彼らに関わった振り返りの会についての発言の中で、複数のリーダーが述べている事柄や、1人のリーダーが何度も発言しているもの、その他、特徴的な発言を抜き出してくる。その中で、意味が近いと思われるものや、同じテーマについて話していると思われるものを集約し、できたまとまりにその発言のまとまりを表すタイトルをつける。上記のような方法を利用してリーダーたちの発言の分類を行った。

表1 質問項目

| 概念 | 問いかけ | 話の糸口 |
|----------------|-------------------------|--|
| TN プログラムの主観的解釈 | あなたにとっての TN について教えてください | <ul style="list-style-type: none"> ・ TN とは、いったいどんなことなんですか？ ・ リーダーとは、どんな役割でしたか？ ・ 振り返りの会とは、あなたにとってどのようなものでしたか？ ・ どのようなことが参考（勉強）になったのでしょうか？ ・ TN ならではのことがらはなんだったのでしょうか？ ・ 印象に残っているエピソード（できごと）を教えてください ・ TN で経験したことがあなたにどのような影響を与えているのでしょうか？ |

| | | |
|---------|--|---|
| ナラティブ | TN に参加することになったそもそのきっかけから、現在までのあなた自身について教えてください | <ul style="list-style-type: none"> ・あなたが TN に参加することは、どのようにして決まったのでしょうか？ ・参加が決まったとき、どのように感じましたか？ ・実際参加してみてどうでしたか？ ・TN で初めて体験したことはなんですか？ ・TN で初めて気づいた自分の一面はどんなところでしょうか？ ・TN で初めて出会った人とはどうでしたか？大学生はどんな印象でしたか？ ・初めて体験したり気づいたりしてから、今現在はどうですか？ |
| 感情の交換 | 他の人との関わりのなかで、(うれしかった/つらかった)ことは、誰との、どんなことでしたか | <ul style="list-style-type: none"> ・どんなふうに振舞うべきだとかんがえていましたか？なぜでしょうか？ ・周りから自分はどう思われていたと思いますか？それはなぜでしょうか？ ・印象に残った人は誰ですか？なぜでしょうか？ ・TN を通して親しくなった人は誰ですか？ |
| 対処資源の交換 | 他の人との関わりのなかで、(助けてもらった/助けてあげた)ことは、誰との、どんなことでしたか | <ul style="list-style-type: none"> ・どんなことを相談(フォロー・貸し借り)しましたか？誰に？ ・どんなことで相談(フォロー・貸し借り)されましたか？誰から？ |

第3節 調査の具体的手続き

リーダーたちへのインタビュー調査は、2004年の9月15日16日17日の3日間にわたり、筆者と立木ゼミ TA(teaching assistant)越智が、クラーク記念国際高校広島分室を訪問して行った。在校生は授業の空き時間に、卒業生はそれぞれの学校の夏休みを利用して、

当時の指導教員の協力を得て、それぞれ都合のつく時間に集まってもらった。インタビューは、主にインタビュアー2人、インタビューイ1人の形式で行ったが、対象者の遅刻などで、時間がずれ込むこともあり、その際は1対1の形式で、平行してインタビューを行った。約1時間から1時間半の時間で、質問を行い、了承が得られた対象者8名については、ICレコーダーでその発言を記録し、その音声データをテープ起こしし、分類した。本論文ではそのデータを仮説検証のメインのデータとして用いる。

伴走者へのインタビューに関しては、社会人ということもあり、一度にインタビューを行うことはむずかしかったため、個別にアポイントメントをとり、喫茶店や大学のラウンジの一角で、それぞれ1時間程度のインタビューを行った。こちらでもICレコーダーで発言を記録し、音声データのテープ起こしを行った。

第4章 結果

第1節 リーダーたちへのインタビュー結果

リーダーたちへのインタビューで得た、伴走者、振り返りの会についての意見を分類したデータが、以下の表である。リーダーたちの発言を KJ 法によって抽出したカテゴリを、大学生についての発言と振り返りの会についての発言、それ以外のことについての発言にわけ、A から H までの記号を振り分けた 8 人のリーダーたちが、どのカテゴリに当てはまる言葉をインタビュー中に何回発言したかというクロス集計表の形にした。

表2 伴走者、振り返りの会に関する発言とその発言回数

| | | A | B | C | D | E | F | G | H |
|-----------------|---------------------------|---|---|---|---|---|----|---|---|
| 大学生について | a. いい人たち、先輩という感じ | 1 | 1 | 1 | 2 | | 13 | 1 | 1 |
| | b. 最初はうざかったけど、仲良くなった | | | 1 | | | 5 | | 1 |
| | c. ずっと見ている人の意見は納得できる | 3 | | | 1 | 1 | | | |
| | d. 手紙うれしかった | 1 | | | | | 4 | 1 | 2 |
| | e. 側で見られているという意識があった | | | | 1 | | 1 | | |
| | f. いなかったらもっと自分勝手になっていた | | | | | 1 | 1 | | 1 |
| | g. 打ち上げでいろいろ話した | 1 | | | 2 | | 1 | 1 | |
| 振り返りの会(反省会)について | i. あった方がいい | 1 | 2 | | | 1 | 1 | 2 | |
| | j. 楽しかった | 1 | 4 | 3 | | | | | |
| | k. 大学生が意見を出す手助けをしてくれた | | | | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 |
| | l. 正直しんどかった | | | | 2 | | 4 | 1 | |
| | m. 書いてまとめたことで、やったことが実感できた | 1 | | | | 1 | | | |
| | n. 回を重ねるごとによくなっていった | 1 | | | | | | | 2 |
| | o. 大学生が入っていてよかった | 1 | | | | | 3 | 1 | 2 |
| その他 | p. カメラは気にならなかった | 1 | | | 1 | | 2 | 2 | |
| | q. 大学に行くとは思っていなかった | | | | | | 1 | 1 | |

それぞれのカテゴリの簡単な説明と、そこにあてはまったリーダーたちの特徴的な発言を表記しておく。

大学生について

a. いい人たち、先輩という感じ

これは、大学生伴走者の存在に対する肯定的な発言を集約したものである。多くのリーダーに見られる発言であり、ここに発言がカウントされなかったリーダーも伴走者の存在を否定的にはとれえていなかったようだが、発言頻度などでは個人差が出ている。

- ・ お疲れさまーとか、でもほんまいい人ですよ、ほんま、気を遣ってくれて（Fさん）
- ・ いい人だった、なんちゅうか、ちょっと、人のことをとやかく言える、ちょっと、え、って感じで、えー、でも、悪い人とかってゆうんじゃないくて、普通になじんでたかな、って思ってるんですけど（Dさん）

b. 最初はうざかったけど、仲良くなった

この発言は、最初伴走者の存在に不信感を示していたリーダーたちが、回数を重ねるごとに伴走者たちとうちとけ、仲良くなっていったことに対する発言である。この発言は、特に課業緊張型のリーダーに見られた。

- ・ んでも、やっぱり最初はねえ、こう、「なんなん」みたいな感じだったんですけど、でも、お互いをどんどん知っていく中で、ええ人ばかりだったっす、おもしろいし（Fくん）
- ・ これはもう、ぶっちゃけで、最初は誰だよこいつら、って思ってたけど、だんだんと、この人たちいい人だなって思うように（Cさん）

c. ずっと見ている人の意見は納得できる

これは、キャンププログラム中や振り返りの会で、伴走者から「こうゆうところがよかったよ」や「こうゆうこともしたよね」という伴走者からの語りかけに対して、リーダーたちがどう捉えていたのかを示す発言である。

- ・ なんか、言いやすかった。同じ班を見てゆってるから、ちょっとはいろいろと、いい、先生よりかはいいです。（Eさん）
- ・ それでその大学生の意見も、また違ったところからみた良い意見だけん、僕らは

がんばって、ただそれをこうなんかそのできごとをぱっと書くぐらいすけど、例えば僕らの監視するだけじゃないすか、大学生って。うん、(子どもの)相手するとかなしに、じゃけ、なんか違った面からの意見が、けっこうわかりつつ、(Aさん)

d. 手紙うれしかった

伴走者が全4回のプログラムの合間にリーダーたちに送った手紙に関する発言である。手紙については、伴走者の話題になったとき、みずから話したリーダーもいた。

- ・ だって、手紙届いたときはびっくりしたっすもん、まさかって思ったっす。(中略)今でもちゃんと、しっかりもってます、捨てんすもん絶対、僕、そうゆうのは。やっぱうれしいやないすか、もらって。(Fさん)
- ・ だって、あの人、毎回終わったあと手紙みたいなん送ってきてくれとって、なんか、いちばん印象のこつとる(Hさん)

d. 側で見られているという意識があった

この意見に当てはまる発言では、数は少数だが、リーダーたちが伴走者という存在をどのように捉えていたかを検証する上で、キーワードとなる発言であると思われるものが抽出された。なお、この発言をしているリーダーでも、カメラ自体は気になっていなかった、と答えるものもいた。

- ・ んー、でもやっぱり自分がやりたいこと、自分、こうこうこうで、こう、ってゆう感じを出しよったっすけどね(Fさん)
- ・ やっぱり、なんかカメラまわしとるとかってことは、まあ、班のけっこう全体じゃないけど、そうゆう広いあれで見よんかなあ、みたいな感じもあるけえ、あー、俺のここがダメだなって、ゆうのもわかつたかもしれんし(Dさん)

e. いなかったら、もっと自分勝手になっていたかも

これは、「もしプログラム自体や振り返りの会に伴走者がいなかったら、どうだったと思うか」「伴走者は何か役に立っていたか」という質問に対する発言である。

- ・ よかったっすよー、だって、たぶん大学生が、おらんかったら、たぶん、他の考えることもできんかったし、たぶん、自分勝手な行動に絶対なつたっすね(Fさん)
- ・ 逆に、おらんかった方が、たぶんおって、おった方が良かったと思う。たぶん、

おらんかったら、こうゆうの（振り返りの会）もないと思うけ、で、なんか、俺らがこう、「どーだった？」「めんどくさい」つって、それで終わると思うのね（Hさん）

f. 打ち上げでいろいろ話した

打ち上げの話題は、インタビューが持参した昨年のプログラム時の写真に、このときの様子が写っていたことから、自然とこの話題になることも多かった。

- ・ そしてまた、これが終わっても打ち上げみたいなん、焼き肉みたいなん行っただですよ、でそんなときまた、話しよったっすけどね（Aさん）
- ・ だってもう、最後、打ち上げだったっすもん、ほんま、「行きましようー」って、焼き肉っす、でもいろんな話しとかもしたっすね。（Fさん）

振り返りの会について

i. あった方がいい

この意見と、jの「楽しかった」をあわせるとほぼすべてのリーダーたちが振り返りの会について肯定的な評価をしている。質問内容は「どうでしたか」という漠然としたものであることが多かったが、それに対し、はっきりとあった方がよかった、と答えているリーダーが複数いた。

- ・ あった方がそれはいいと思いますね、次回のこととか、よかった悪かったこと、いろいろ（考えられるので）これはやるべきだったと思います、間違いなく。（Gさん）
- ・ あんときは、「たいぎいのう」思いよって、でもこう（紙に印刷された振り返りの会の親和図を見て）なったら、「ああ、ちゃんと書いとってよかった」って（Fさん）

j. 楽しかった

iの「あった方がいい」とこのカテゴリの分類の基準は、発言内容が、振り返りの会を必要なものとして捉えている発言か、それとも楽しかったものとして捉えているか、という差においてである。このため、iとjの意見が重複しているリーダーもいる。

- ・ あ、反省会けっこう、なんかそれはそれで楽しかったですよ（Aさん）
- ・ はいはい、やったっすねえ、あれ、意外とよかったっす。僕は、反省会好きやった。なんかいいじゃないすか、反省会って（Bさん）

k. 大学生が意見を出す手助けをしてくれた

これは、振り返りの会での様子について質問したときに答えるリーダーが多かった発言である。cの「ずっと見ている人の意見は納得できる」という意見とも近いが、ここでは、振り返りの会での様子に特化した意見をまとめた。

- ・ やっぱりこう、先輩からのアドバイスってゆう、こうゆうときも大学生、じゃないすか、で、「これかけや、それかけや」じゃなくて、じーっとこう見守ってて、「こうゆうことも書いたらえんじゃないん？」みたいな、アドバイスをくれてたっす（Fさん）
- ・ まあ、大学生が、意見をこう、出すように出すようにまあ、しゃべってくれた感じで、「あんときはどうだった？」って（Gさん）

l. 正直しんどかった

リーダーたちの正直な意見として出た発言である。だが、この発言イコール振り返りの会が嫌いであった、ということではないようで、「しんどかった」と答えていたリーダーが、インタビューの他の箇所で、「あって良かったと思う」という発言を行ったりもしている。

- ・ これ書くときけっこうなんか疲れてたから、（こんなない方がええのに、とか思ってた？との問いに対し）反省は大事なな、とか思いながらも、（Dさん）
- ・ あれは、けっこうしんどかったっす、ぶっちゃけ、たいぎかったっすけっこう。（Fさん）

m. 書いてまとめたことで、やったことが実感できた

これは、振り返りの会の方式についての発言である。前述のとおり、振り返りの会では、KJ法の手法で意見を出し、親和図にまとめるという方式がとられていたが、このことをよい方法だったと感じているリーダーは、明確に言語化されていないもの（質問者の「それはこういう意味のこと？」という問いに「うん」や「そんな感じ」とだけ答えているケース）を含めると、数多く見られた。

- ・ 考え、終わったあと考えて、書いてみたら、よかったな、ってまた実感できる（Eさん）
- ・ なんかみんなの意見とか見て、そしたらやっぱなんかその日のこと普通に、あらためて書きよったら、あー、こうした方がいいのかもしれんのかって思い出して、なんかわかることもあって。（Aさん）

n. 回を重ねるごとによくなっていった

この意見を述べたのは2名のリーダーであるが、彼らは振り返りの会で同じグループに所属していた、このことに関しては、次章の考察で、伴走者へのインタビューとともに、詳しく述べる。

- ・ 一回目は、ほとんどゆうこときかない、とかだった(けど)、たぶん僕が3回目ぐらいで、なんか、「こうの方がいい」ってゆうのを書いたんですよ、で、そのときなんか気づいたんですよ、教え方にしても。(Aさん)
- ・ 最初の方は別になんか、一回目の反省会とかなんか、もう愚痴ばっかみたいなの、文句ばっかみたいなの。なんか、2回目、3回目かんときに、なんかあんまなくなかった、そうゆうのが。「雨が降る」とか、じゃなくて、「雨が降ってどうするか」みたいなの。(Hさん)

o. 大学生が入っていてよかった

これは、振り返りの会での大学生の存在についての発言である。k. 「大学生が意見を出す手助けをしてくれた」との分類規準は、前者は自分たちの意見を促したり、まとめたりしてくれたことへの発言、このカテゴリは振り返りの会に伴走者も参加して意見を述べたりしていたことに関する発言である。

- ・ やっぱり、大学生の方から見てわかることも、あると思うので(Dさん)
- ・ ま、いいとこついとることもあったし、やっぱなんか、別にカメラをまわしとって、行動見とったり、話きいとったりするけん、いろいろいいことは、案がでてきた(Aさん)

その他

p. カメラは気にならなかった

この発言は、「ビデオカメラで撮られていることはどう感じていたか」というインタビューの質問に対する答えが多い。eで「側で見られているという意識があった」と答えたリーダーの、「カメラ自体はそんなに意識していなかった」という発言も含まれる。

- ・ そんなに撮られてるって感じはなかったです、さりげない感じで撮ってたんで、なんか(Gさん)
- ・ あんままわるとるって感じはしませんでしたけど(Dさん)

q. 大学に行くとは思っていなかった

これは2003年度報告書で述べられていた「憧れの醸成」を裏付ける発言である。卒

業生6名のうち、2名がこのような発言をしていた。

- ・ だって僕はねー、大学入るとおもわなかったですもん、実際問題。大学受かったって、もう家族に行った瞬間、泣きよったっすもん。(Fさん)
- ・ 大学なんて、絶対行けるもんじゃないと思ってて、ま、行く気もなくて(Gくん)
- ・

第2節 伴走者インタビュー

タッチ・ザ・ネイチャー中に伴走者がどのような行動をとっていたか、どのように考えていたかについての、伴走者インタビューの証言をまとめたものが以下の表である。伴走者へのインタビューについては、彼ら自身が昨年の効果分析スタッフでもあり、伴走者という存在がもたらした効果についても、一定の知識とそれぞれの見解を持っているため、発言の分類や、発言回数のカウントなどは行わず、彼らが伴走者としてプログラムに参加していたときの行動や考え方についての、主観的な振り返りを表にまとめた。

伴走者個々のエピソードについては、次章の考察で言及する。

表3 伴走者の証言から

| 行動編 |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 伴走者の側からはあまり積極的な話しかけ、関わり行動は行っていない。・ 「子供たちもリーダーについていくし、大学生もリーダーについて行く感じ」・ 振り返りの会、途中からリーダーたちで進行するように(A班伴走者)・ まずカメラをとる、という役割があった・ 子供たちは、伴走者にはほとんどよって来なかった、伴走者も子どもにはノータッチ・ IPAは5分間ずっと一人の人間を追って撮影する、必然的にその間はずっと一緒にいる、後を追っていく・ プログラムの内容などについてはアドバイスや教えたりはしなかった |
| 考え方編 |
| <ul style="list-style-type: none">・ 「主役は高校生」という共通認識・ タッチ・ザ・ネイチャーに対する余計な先入観がなかった |

- ・ 伴走者概念はゆるやか、途中で話し合いや変更もあった。
- ・ リーダーたちからの不信感、感じていた（一回目）
- ・ 基本は肯定的な反応、聞いてあげる

第5章 考察

第1節 仮説の検証

ここではまずインタビュー調査の結果をもとに、リーダーたちは伴走者という存在によって、タッチ・ザ・ネイチャーという「場」の総意としての他者のまなざしと、伴走者という「鏡」に映った自己を見る自分自身のまなざし、2つの「まなざし」の存在を意識し、そのことが、彼らの自我の形成、つまり内面の成長により影響を及ぼした、という仮説の検証を行う。

結論からいうと、彼らが伴走者とその態度を、他者からと自分自身から、2つのまなざしとして受け止めていた、という仮説は、複数のリーダーたちのインタビュー内容から裏付けられるといえるだろう。

仮説を裏づけるリーダーたちの発言としては、前章表2のc「ずっと見ている人の意見は納得できる」やd「側で見られているという意識があった」、e「(大学生が)いなかったら、もっと自分勝手になっていたかも」などのカテゴリに集約されている発言がこれにあたりと考えられる。昨年度の調査でも内面の成長が認められていたDさんは「やっぱり、なんかカメラまわしとるとかってことは、班のけっこう全体じゃないけど、そういう広いあれで見よんかなあ、みたいな感じもあるけえ、あー、俺のここがダメだになって、ゆうのもわかつたかもしれんし」

と述べている。このDさんの発言にみられるようにリーダーたちは、伴走者の目を意識して、そこに映る自分の姿を想像することで、自分自身についての認識が生まれたと考えられる。また同時に、全体リーダーとして、他のリーダーよりも伴走者との関わりが少なかったというHさんも、伴走者がいることで、何か役にたっていたかとの問いには「逆に、おらんかった方が、たぶんおって、おった方が良かったと思う。たぶん、おらんかったら、こうゆうの(振り返りの会)もないと思うけ、でなんか、俺らがこう、「どーだった?」「めんどくさい」、つって、それで終わると思うのね」

と答えている。自分たちだけで行えば、愚痴だけで終わってしまうところを、伴走者が客観的な視点を提示してくれたことによって、振り返りの会が意味のあるものになった

という意見である。リーダーたちは、Hさんの発言に見られるように、伴走者の存在から客観的に他者から「見られている」自分の存在を意識して、他者からの期待を受け止め、その結果、自分勝手な行動が律されたともいえるだろう。

ミードはそういった他者の期待にたいする自我の反応を「創発的内省性」と名付けている。「創発的内省性」とは、他の人間の目を通じて、客観的に自分の内側を振り返ることによって、そこになにか新しいものが生み出されることである。(Mead 1934)

リーダーたちが伴走者のまなざしを通じて自己を見つめていたプロセスは、まさにこの「創発的内省性」のプロセスだといえるだろう。また、a「いい人たち、先輩という感じ」という、伴走者を肯定的な存在として捉える発言からも、リーダーたちが伴走者をタッチ・ザ・ネイチャーという場における正しい存在として認識していたことがうかがえる。このことから、伴走者はリーダーたちにとっての目に見える形での「一般化された他者」になりえたのではないかと考えられる。

以上のことから、リーダーたちにとって、伴走者の存在は、自己を見、自己を映す、「鏡」であり「まなざし」であったのだといえるだろう。

第2節 両インタビューより考察

第1項 「鏡」としての伴走者

前節の検証により、最初に立てた、「伴走者の存在は、リーダーたちにとって自己を見つめる二つのまなざしを意識させる効果があった」という仮説は、リーダーたちのインタビュー結果によって支持されが、本項では、伴走者へのインタビューから得た内容を通して、この仮説にさらに考察を加える。

伴走者たちへのインタビューでまず浮かび上がってきたのは、表3に表記したように、伴走者たちがあまり積極的な話しかけや関わり行動を行っていなかったことである。自分たちから積極的に話しかけていったというよりはむしろ、リーダーたちの話しかけや、彼らがとった行動に対する反応や、リーダーたちの不信感をほぐし、撮影を円滑に行うため程度のコミュニケーションがメインであったという証言は、ほぼ伴走者の全員が述べている。ただ、その程度は、リーダーのタイプや、伴走者の判断によって差があったようである。ある伴走者は自分の班のリーダーたちと接して、彼らが人とうち解けるのに時間のかかるタイプだと判断し、関わり方を決めている。

「まあ、僕は、模範になろうとか、なんか「こうしたらいいよ」とか指導もしてない

し、なんかもうただいるだけで異質であるし、新鮮やと思うから、だけでいいかな、と。いるだけでも絶対違うと思うし。そうですね、まあ、常に話しかけたりはしなかったですね、あんまりいややろなって思ったし、なんかきっかけがあったときだけ話すとか、子どもに蹴られたとか、なにかが起こって話すとかがくらいで。」(伴走者 A さん)

またある伴走者の場合はリーダーの言動で気付いたところについては、こまめに反応するようにしていたことが、あるリーダーのちょうど自分でも気付きはじめた自己の変化の部分と上手く対応し、彼が自己の変化を意識する上での裏付けとなったことが事後インタビューで明らかになっている。

「それが偶然やってんけど、Cくんが、Cくんのインタビューしてたときに、彼はそのすぐ、自分は我慢できない人間やと思ってたみたいなのね。で、それはみんな周りの友達も「Cくんはこうや」ってゆうのがあって、すぐ、プチって切れてしまうタイプの子やったらしいんやけど、あ、自分って子どもにがまんできるんやな、てことを思ったらしいねん。なんか「最初はむかついてたけど、だんだんそうおもわんようになってきて」ってゆつて。で、それがたまたま私も、「ようあんだけ蹴られて我慢してるなあ」と思ったから、それをやっぱ、3回目、2回目3回目からけっこう割とゆつてたのね、「ようあんだけ我慢してるなあー、えらいなあー」とかって、みんなにやけど。でもそれがなんか偶然にもよかったらしくて。なんか、きちんと「Cくんあなたはこうゆうところが・・・」とかゆつてたわけじゃなくて、(振り返りの会で)気づいたところを書いてるときに、みんなが紙をだしたときに、「そうやな、これ、そうやった」とかって感じで。(伴走者 B さん)

このように、程度ややり方の差はあっても、伴走者全員に共通していたのが、基本はリーダーの言動に対する反応、共通認識である。そしてこの伴走者という存在が能動的なものではなく、リーダーの行動、話に対する反応がメインだったことが、彼らの「自我の鏡」的性格を強めたのではないだろうか。リーダーたちは、自分の言動に対する伴走者からの反応の中に、自分自身の姿、いわば鏡に反射された姿を見ている。伴走者の言動がリーダーに対する反応メインであったことは、リーダーたちが自分自身をより見つめやすくする効果となっていたと考えられる。

第2項 試着室の鏡効果

リーダーたちの「自我の鏡」としての効果を検証されている伴走者であるが、実はその鏡の映り方には、一種のゆがみがかけられていたのではないかと、というのが第2の考察で

ある。デパートや服飾店の試着室に置かれている鏡が、実際よりも少し細く映るように凹凸を調整して作られているというのは有名な話であるが、この試着室の鏡と同じように、伴走者という鏡にうつるリーダーたちの自我も、実物よりも少しよい面が強調されていたのではないだろうか。

伴走者の定義として、「評価も否定もしない」というのは 1 つの大きなポイントである。よって伴走者たちは「これはがんばっていたね」「こういうことがすごくよかったと思う」といった正のフィードバックは行うが、リーダーたちへの否定的な発言は基本的に行っていない。その結果、リーダーたちの目には伴走者の中に映る自分の像は、実際よりもがんばっている面、よい面が強調された姿であったと考えられる。

ゆがみを持った鏡というと、よくないもののような印象を与えるが、タッチザネイチャーという、リーダーたちの内面の成長を引き出すことを目的とする場において、一定の正のゆがみは、リーダーたちのやる気と自信を引き出すために非常に有効であったと考えられる。実際、前項でリーダーの変化への気づきをサポートした例として紹介した伴走者 B さんはリーダーたちの言動に対し、少し大げさに反応することによって、リーダーたちのやる気を引き出している。

「撮っているときに、リーダーとかがなんかおちゃらけたり、とかするじゃない？そしたらこっちもちょっとおおげさに、ほんまにおもしろくて大笑いしてる時もあったけど、基本はやっぱりこうとっかかりとして、大きめに（リアクションすると）そしたらやっぱり高校生もうれしそうなんよね。で、やっぱり気付いたことを、「あれよかったなあ」とか「こどもにこうゆう風にされて、よく我慢してたなあ」とか、高校生にいうってゆうか、フィードバックしてあげたら、また高校生もうれしそうで、「あ、あれよかったんや、じゃあ今度はこうしてみよう」って感じで、けっこう子どもへの接し方もわかってきたんじゃないかなって思うし。」(伴走者 B さん)

また、他の伴走者からも、振り返りの会などで、リーダーの気持ちをのせるために、大げさな反応をとっていた、という証言も得ている。特にこの方法は、課業緊張タイプのあまり普段周囲からほめられることのないリーダーたちにとって有効だと言える。

このように、伴走者によって行われた正のフィードバックが、リーダーたちにとって自己の成長を実感し、さらにやる気を引き出すために重要であったということからも、伴走者による「自我の鏡」は、すこしゆがみがある方が効果があると考えられる。

第3項 カメラという役割の存在

ここまで、仮説に基づいた伴走者の効果について述べてきたが、最後に仮説とはすこしはずれた効果が検証された事柄、カメラの果たした役割について、考察する。

2つのまなざしの存在という仮説を立てた当初、伴走者が撮影に使用していたビデオカメラの存在は、仮説を立証する重要なポイントになるのではないかと私は考えていた。ビデオカメラという、視覚を象徴する機材の存在が、リーダーたちに見られている自分を意識させる重要な要素の1つではないかと考えたのである。結果からいうとこの考えははずれであった。結果の表2のp「カメラは気にならなかった」にあるとおり、カメラでとられるのを非常にいやがっていた一人のリーダーを除くと、ほぼ全てのリーダーが、カメラは気にならなかった、撮られているということは意識しなかったと答えたのである。彼らがカメラのレンズよりも、カメラの向こう側にいる伴走者からそそがれるまなざしを意識していたことは、第1項で述べた通りである。

カメラはむしろ伴走者がタッチ・ザ・ネイチャーという「場」に所属する上で、重要な小道具だったのである。2003年度のプログラムでは、伴走者であると同時に調査者であった伴走者は、IPA（相互過程分析）という調査のため、特定のリーダーを一定時間ずつカメラで追いかけるという役目も担っていた。カメラ撮影はリーダーたちには、「タッチザネイチャーの思い出ビデオを作るため」と説明されていたようである。そのため、リーダーたちにも、「ああ、あのカメラマンの」といったようにカメラを撮っていた人たちと言う風に記憶されている。

そのカメラマンという役割があったからこそ、リーダーたちは伴走者という存在を受け入れやすかったのではないかというのが、ここでの考察である。先生でもない、リーダーでもない伴走者はカメラを撮る、という役割があったからこそ、違和感なくタッチ・ザ・ネイチャーという場にとけ込み、リーダーたちから一定の信頼を得たのではないだろうか。「もしカメラなしで、伴走者をやっていたらどうなっていたらと思うますか」という問いを、ある伴走者に投げかけたときの回答も、この考察を裏付ける内容である。

「もしカメラがなければ、俺らそういう意味ではやることないやんか、なんもないから。で、俺らはきつとなんかやるやろうと思う。だからもしかしたら、あの子らが、高校生がやらへんかったら俺らがやると思う、逆に高校生ごとまとめてしまったりしてるかも。だから結局俺らがリーダーになってしまってあかんのちゃうかな。たぶんそのときはそうならないように話し合いとかするんやろうけど、もうちょっとなんかしゃしゃってるかも。

だからカメラがあったんはちょうどよかったんちゃうかな。結局リーダーは高校生やから。」(伴走者Cさん)

そして実際にこの証言を裏付けるようなエピソードも存在する。伴走者の担い手を大学生にしたのは、2003年度の調査スタッフの考案であったが、実際は第1回目のキャンプの際には大学生の他に、芦屋のタッチ・ザ・ネイチャーOBたちも伴走者として参加していたのである。しかし、撮影者としての役割があった大学生と違って、本当にただそこにいることだけが役割であったOBたちは、することがないために大学生以上に「何しにきているんだ」という広島リーダーたちの不信感を招いた。また芦屋でのタッチ・ザ・ネイチャーをベストの形として記憶している彼らは、広島でのやり方を受け入れることが出来ず、そのことが余計に反発を招き、2回目からは、伴走者の役目からはずれてしまったという経緯がある。一方大学生は、思い出ビデオの撮影をしているカメラマン、というリーダーたちにも理解できる役割を持っていたことと、プログラムの内容についてはすべて高校生に従い、余計な干渉をしなかったことで、最初は警戒されながらも、徐々に信頼できる第三者として、リーダーたちと関わるのが可能になった。

カメラを撮影する、という役割の存在と、余計な干渉をしないことで、リーダーたちの自主性を妨げなかったこと、この二つは、伴走者がリーダーたちにとっての意味のある他者となり、自我を映し出す鏡となる上で、土台となる信頼関係を作り出す上で、重要な要素であったといえるだろう。

(40字×30行)

(200132字)

[参考文献]

浅野智彦,2001,『自己への物語論的接近-家族療法から社会学へ』劉草書房.

Charles Horton Cooley,1902,Human Nature and the Social Order, Charles Scribner's Sons,(=1921, 納武津訳『社会と我-人間性と社会秩序』日本評論社.)

George Herbert Mead,1934,Mind, Self, and Society; from the Standpoint of Social Behaviorist, The University of Chicago Press. (= 1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『現代社会学体系 10 ミード 精神・自我・社会』青木書店)

立木茂雄編, 2003, 『不登校生の自立のために何ができるか 無学年制自然キャンプにおけるリーダー経験の効果を実証する』2002-2004 年度社会福祉・医療事業団(子育て支援基金)助成金研究成果報告書, 財団法人子ども支援財団.

編, 2004, 『不登校生の自立のために何ができるか 無学年制自然キャンプにおけるリーダー経験の効果を実証する』2002-2004 年度独立行政法人福祉医療機構(子育て支援基金)助成金研究成果報告書, 財団法人子ども支援財団.

吉本顕太郎, 2004, 「キャンププログラムにおける場の構造と参加者の自己の変容」『同志社社会学研究』2004(8) 55-69